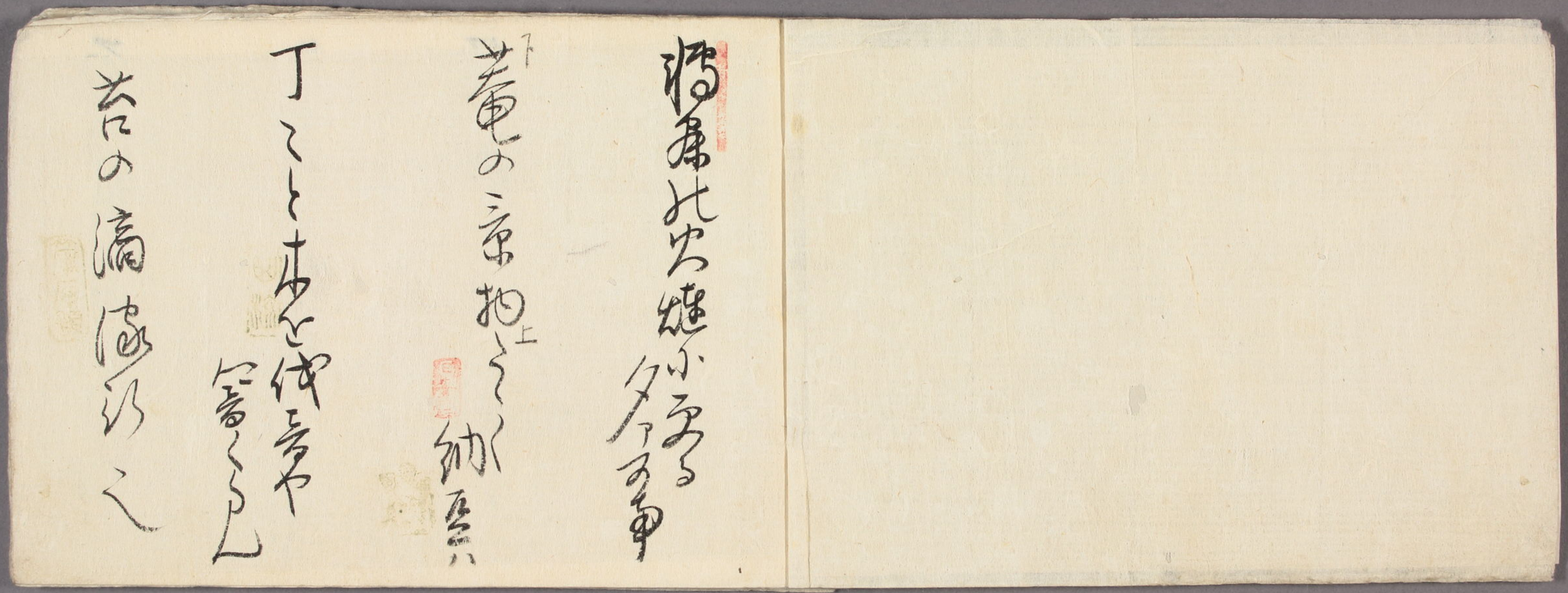
百員



酒泉北堂雄小雨多年

菊の京拍子上納原

丁〻と雨を伏音や

苔の滴ほろ〻

恵美子薄衣か
うつりてけり

古人の家成しかば
いつてきぶ

行秋の人庭に月よ
高かりて

書の行方〳〵を秋雨

山路の菊表はかり
姫ゆり

春雨の降かふる中
夏かり

毎年に春雨
歩の例

古寿引
秋雨

此ころ此頃は霜ゝ既ふ
積ふ如り

庵の笠しやと
勇さ活て

白粉ハ独の顔にふ
紅さして

懺悔は古いてふ
名色ろ入墨

忘ふる嬉しゝ物入れ

は毎夜て敵さはかなし
影の為

うき朝日
雪の山の端

冬は枯て枕ふ立し
やれ屏風

色紙と良は
紅かし 古つ哉

踏てい被れ　花の幕

鞦韆とんで　母の打　檻

又しても　籠れる雲　雲の風

陽炎れ　穴の　高麗さ

南を遠ま　巡れ　男山

大無花　蕾と　蕾と　巡れ

御先打れて　命も

旅の　苔ひ

南禅寺の　寺の　打鐘

居なからに年の暮
如意庵法書

打むかふ
清盤二母る

戌打を三れよと
人の悔られそ

亭寒へ向け
ホ畫生
次ともる

吉やかて漕れ行きし
川の秋

冬は打ふ
菊の初め
相

猿の音ん酒盛しや
思ふらん

小唄市に妹か帯く

杉風ハ素堂の門人なり

士農工商雨の涼

待佛て梅ゐ東西

川岸し

遠ぬ鶯ホ

うぐひす向き合ふ

ほうらく作ハ作の作法

雪の孔

あ世の業ひ

ぐひす 百用

六墳ハ長れ回廻と

ぐひかれて

新ふ門て

色かゝ雲

文政十一年 樓上居の月

角紫粉かたの 蕎麦の秋

忙然と 絵ぬしたるこの
蕎麦の月

陰ふかし

鶯啼のにこそ

もるふ角角 茶門

何かれふて 春や 陽華 酒

三月

春の秋色 楚さかと
ぬく 熊ひ

水施 秋影 春

情の色 翻

涼し月とはなれてもえへぬ
形なりけ

冬もこゝ意飛よ江のまか路

思れと其名は立ん
恋ともふ

盛の根に叩して潮吹

兎角して出凹に来る
硯石

金(カ子)みて見れと
貧居起せり

うつる世や灰やの看識は
むかしして

簞理に出むか須
宝咲の梅

梅流の獅子舞し始也

[illegible]やうの事

柔有板

十家猩々[illegible]

子[illegible]吹[illegible]の[illegible]

三ウ

杜若を集ふて[illegible]

[illegible]らやんて[illegible]

童謡を五京[illegible]

[illegible]少し

[illegible]

[illegible]の仕来者

夏虫いとゞ寒さと
ちゝ鳴ける

登り詰て
拍子に書る

氏社の御神楽かな

計い立あれ
計さ一の山

風の涼ちらつく
三ヶの宮

鶴ゟ
ちゝ鳴ける

義経の腐り付きん
古社

御亀載き
初て忘してゐる

花の下に酔こゝ
ぼの事ぬ先

常ふれて
曲れの高

すま
元伟樂の郷ふて居る
夕雲雀

震かゝれふ
ふるあの音里

芝も青ふ思くゆ生る
郷の郷アこう獅
乃下し

ち食集り塞を
振て

動南さ山る子果て
紫月こ

ふるる郷ぬ
はる郷ぬ日後
恵ひ編笠

蜀山詩程孫八を訪ひて

よ福も長し　亡ゝ翁平紅

廣正の伽藍巍々たり　本山

詳明ぬ名不舊跡

さゝ涼し笠の花にかゝる秋の猿

水風蔵川に夏の舟満

是又月にいく日本勝とそゝぎ白の松の名

借人々母指の月利自増して

京家二しき少輿契る分けし記

ナウ

拾ひ捨てられし言葉を
先達てもある在郷武士

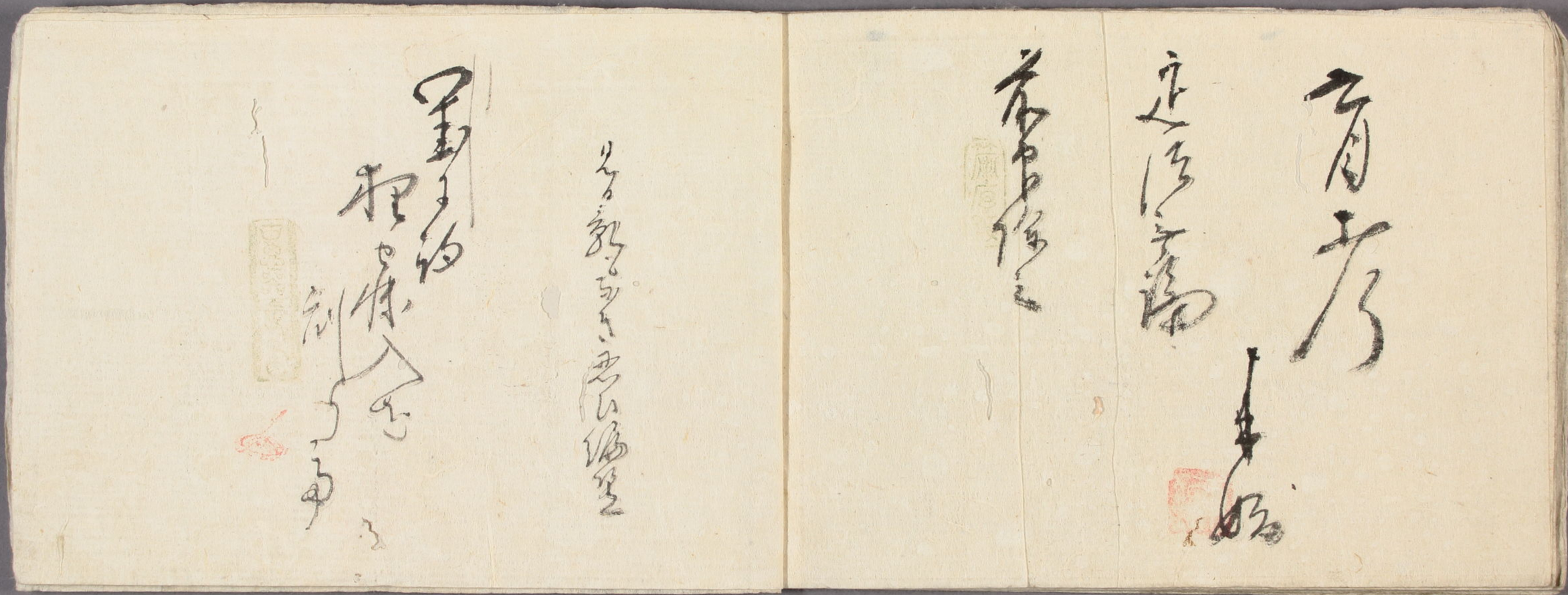
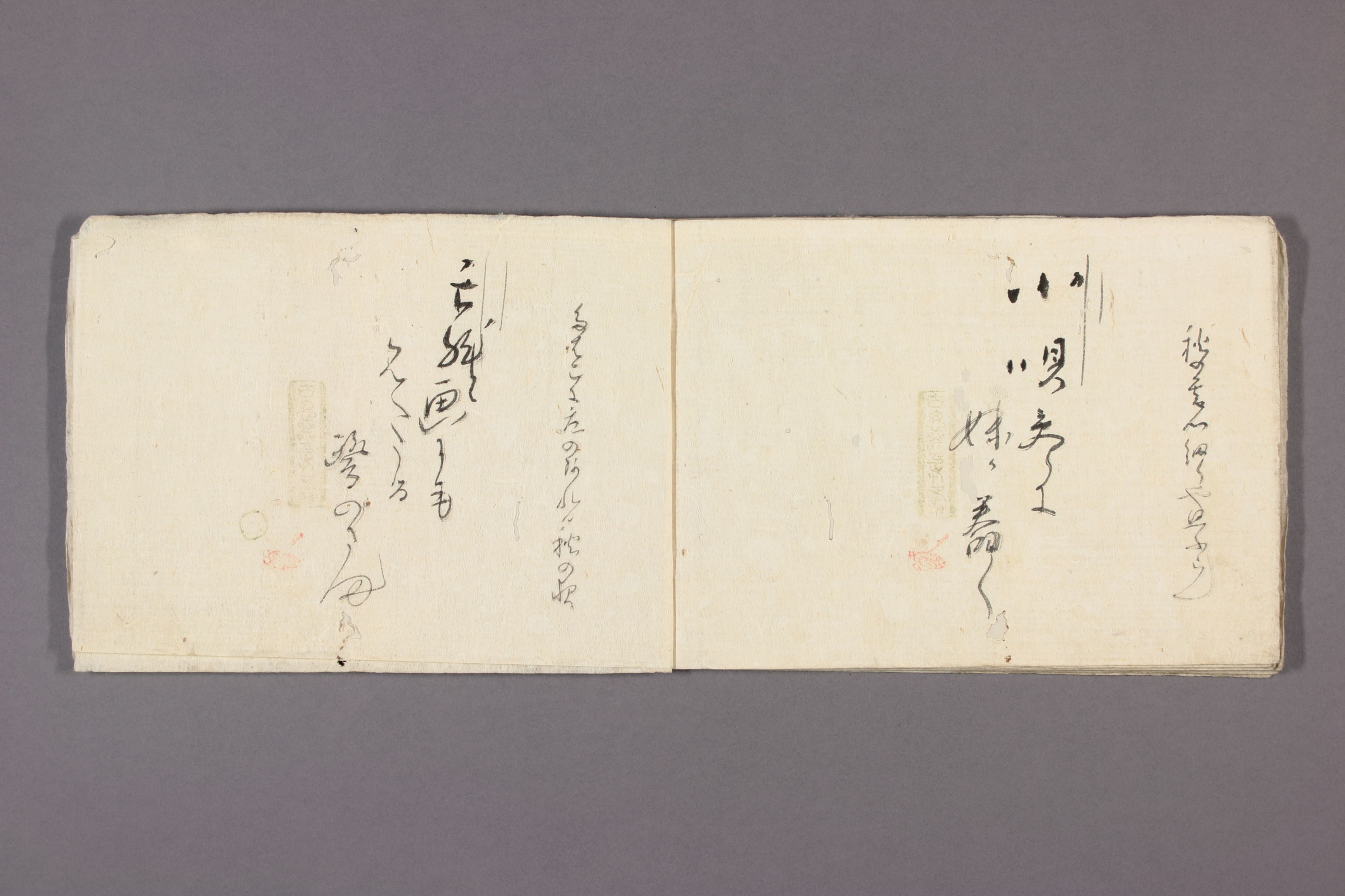
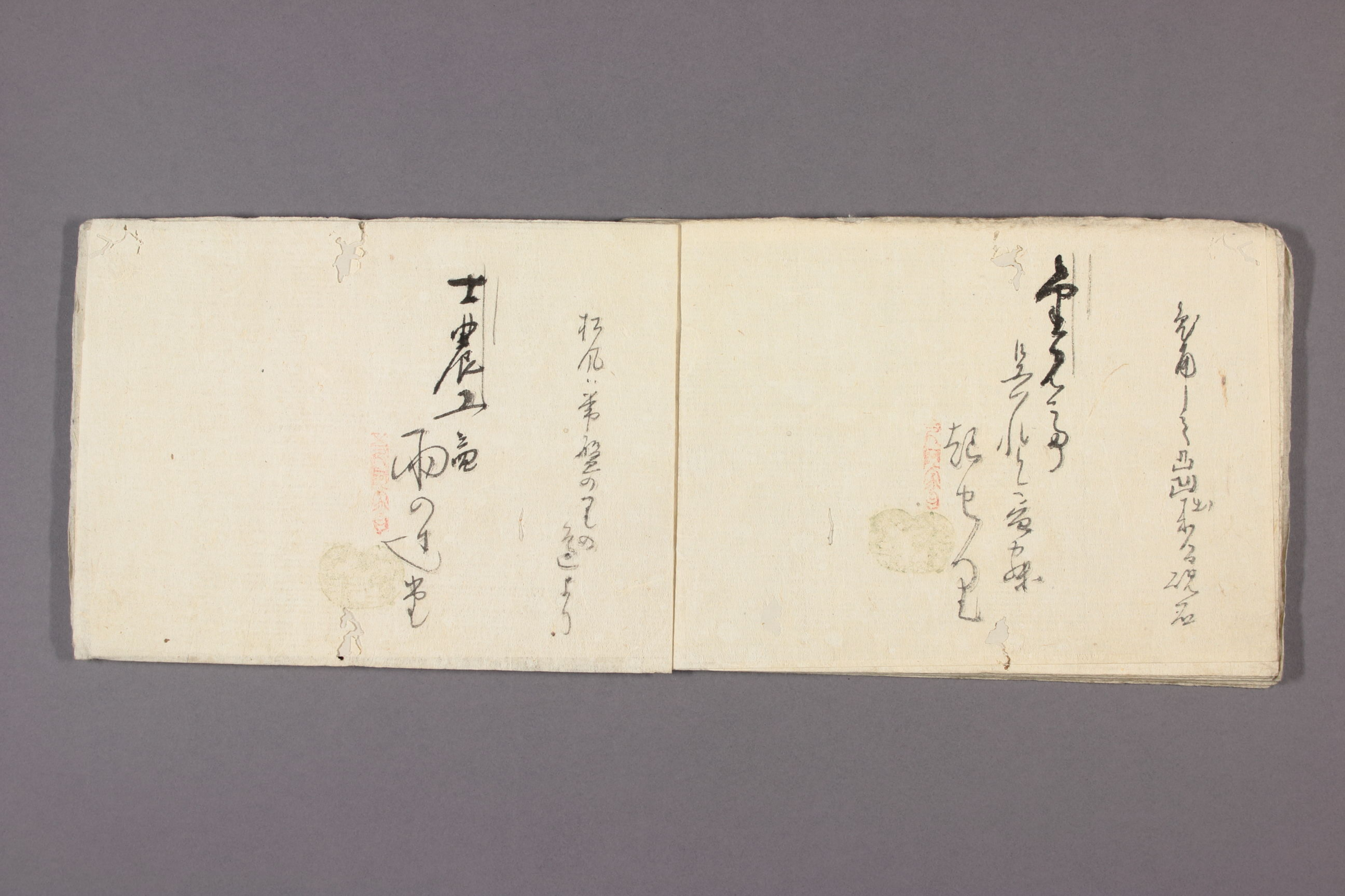
ちらと云うもの
毎日午馬

身上を潰してしまひ
出つくしてい

乗馬を売り
帰ふ紫子を

百姓が世話の行き届
毎日

衆寄おしてい
吳服屋

云はせる
賢

花の春
茅屋にて
道東